

博士論文 概要書

「アルバニア人居住圏」地域にみる民族・宗教とアイデンティティ

—現代バルカン半島の平和構築に向けて—

Nations, Religions and Identity around
“Albanian Residential Area” in Balkan peninsula

—Toward Peacebuilding of Contemporary Balkans—

早稲田大学大学院社会科学部

地球社会論専攻 国際協力・平和構築研究

金森 俊樹

I. 本論文の問題意識と学術的意義および射程

1989年に始まった東欧革命は、1990年代に入るとバルカン半島地域の南東欧諸国へも波及した。現在のアルバニア共和国と独立紛争を経て、7つの国家に分裂した旧ユーゴスラヴィア連邦を構成していた諸国とが位置している地域である。

旧東欧地域とされていた中でも、現在、中欧(中東欧)地域とされているポーランド、ハンガリー、チェコ、スロヴァキア(旧チェコ・スロヴァキア連邦)等の諸国と比較される際、とりわけ後進的といわれてきたアルバニアや旧ユーゴスラヴィア連邦構成諸国も、東欧革命が波及する以前の独自性の高い社会主義体制から、政治的には自由主義や民主主義、そして、経済的には資本主義市場経済体制へと1990年代以降の過渡期を経て、体制転換が進行してきている。

しかし、この1990年代の過渡期から、バルカン半島南西部地域の諸国にみられる一つの共通した新しい傾向がみられるようになったという側面は見逃せない。

それは、脱・イデオロギー時代に入った同地域におけるアイデンティティの喪失から来た新たなアイデンティティへの希求という傾向である。馬場伸也は、冷戦終焉以前から、国際政治学におけるアイデンティティの重要性を述べていたが、旧東欧地域において、社会主義イデオロギーというアイデンティティの対象の一つになり得た存在が喪失した代わりに、民族・エスニシティやナショナリズムならびに宗教といった古くて新しいアイデンティティの対象が、旧東欧地域、とりわけ、バルカン半島南西部地域の諸国を中心に力を得てきたのである。

なお、「アイデンティティ」とは、心理学出自の学術用語であるが、こうした国際関係論における文脈で議論する上で、本論文で用いた「アイデンティティ」概念は、馬場の用いた「文化的アイデンティティ」の定義に依拠したものである。

米国を頂点とする西側と旧ソ連邦を頂点とする東側との間に存在したイデオロギー対立が国際関係を規定していた冷戦体制が崩壊して以降、世界の他の地域でもみられた脱・イデオロギー時代における民族・エスニシティやナショナリズムならびに宗教等のアイデンティティの対象となり得る存在の復活といった傾向は、このバルカン半島南西部地域諸国においても顕著にみられるようになった。逆に、イデオロギー対立の中で「封印」されていたアイデンティティの対象が復活したという見方も可能である。

この現象は、アルバニアでも旧ユーゴスラヴィア連邦構成諸国でも、程度の差こそあれ、体制転換の移行期と並行して出現し、現在に至っている

具体的には、バルカン半島諸国の諸民族が歴史認識として抱いてきた「大民族主義」の復活や宗教に関する紛争といった形で現れた。

西欧地域諸国の諸民族と異なった歴史を有してきたバルカン半島南西部地域諸国の諸民族は、西欧的な「領域的支配」より「民族的支配」を優位に思考するという歴史認識上の特徴を有する。このことから、考古学的な時代まで遡及して、歴史上、自民族が最も繁栄していたとされる時代、換言すれば、自民族の「黄金時代」の最大版図を自国領と認識する傾向が顕著である。

バルカン半島南西部に居住する諸民族にとっては、この点で、自らの民族・エスニシティやナショナリズムといったアイデンティティを、歴史認識の上からも易々と妥協せず、強固に主張する傾向が珍しくない。

また、シュガーの指摘のように、近代以降の西欧地域において、市民革命が発端となって出現し、急速に普及していった「ネイション」概念が、中東欧地域、そして南東欧バルカン地域へと伝播していった過程で、西欧地域の元々の「ネイション」概念に歪曲が加えられたり、曲解されたり、さらには、伝播した各地域にすでに存在していた土着的な共同体の概念と習合したりした結果、民族・エスニシティやナショナリズムそれ自体が持つ意味さえ、齟齬が生じるようになっていった面も、「大民族主義」が発生し易いというバルカン半島南西部地域の民族・エスニシティやナショナリズムへの影響は大きい。

本論文で詳述していくバルカン半島南西部地域の旧ユーゴスラヴィア連邦から独立したコソヴォを例にみると、現在のコソヴォにおいて、人口比で 9 割以上という圧倒的な多数派民族であるアルバニア人勢力と人口比で 1 割以下の少数派であるセルビア人勢力との間では、1998 年から 1999 年にかけての 2 次にわたる「コソヴォ紛争」を臨界点とした両民族間の対立が、NATO のような外部の勢力による軍事介入まで招く武力紛争の段階にまで激化した。紛争後の 2008 年には、コソヴォ共和国の独立宣言がなされたが、この両民族間の対立が武力紛争へと激化した原因は、単に、コソヴォが旧ユーゴスラヴィア連邦を構成していたセルビア共和国内の一自治州であったという行政的な事情以上に、コソヴォを「中世セルビア王国(ネマニャ朝)の故地」であるとするセルビア人の歴史認識が問題を深めたという指摘もなされている。

曰く、中世セルビア王国というセルビア民族の「黄金時代」の中心地がコソヴォであり、さらには、中世セルビア王国の当時の実質的支配者であったラザル公が、当時のボスニアの領主等と同盟を組んで、バルカン半島に進出著しかったオスマン帝国軍と 1389 年に、現在のコソヴォにおける「コソヴォ・ポーリエの戦い」を行い、オスマン帝国軍に敗北したという哀調を帯びた民族叙事詩の様な因縁ある故地であるという「大セルビア民族主義」的な歴史認識がセルビア人側には存在しているのである。

確かに、旧ユーゴスラヴィア連邦解体時の内戦中、ミロシェヴィッチ等のセルビア人政治指導者は、旧ユーゴスラヴィア連邦内の一般のセルビア人からなる勢力に

向けて、大セルビア民族主義を政治的な目的の達成の為に利用しようとメディア等を通じて大いに煽動した。

しかし、そういった煽動が、一般のセルビア人の感情に訴えかけ、さらには現実の行動につなげさせる素地が、こうした歴史認識の中にあつたことも一方で事実なのである。

一方、アルバニア人側にもアルバニア人が有する歴史認識が存在していたという指摘もある。

現在のコソヴォに居住するアルバニア人の出自は、その大半が、オスマン帝国によって支配された時代以降にコソヴォ地域へと移住してきたアルバニア人の末裔なのであるが、アルバニア人側の歴史認識では、歴史をさらに遡って、元々、アルバニア人の祖先は、ローマ帝国時代以前から、バルカン地域西部のみならず古代の欧州の広域にわたって存在した「ダルダニア」全域に居住していたイリュリア人の末裔であり、早くとも 6 世紀半ばより以降に南下してバルカン半島南部に定住し始めたスラヴ系民族の末裔であるセルビア人よりもはるか以前から居住していたのだとして、コソヴォにおけるアルバニア人の居住の正統性を主張しているのである。

これは、セルビア人の「大セルビア民族主義」に対して「大アルバニア民族主義」的な言説と対比できるであろう。

こうした政治的、経済的な利益をめぐる紛争から、民族・エスニシティ、ナショナリズムならびに宗教といったアイデンティティをめぐる紛争へと戦争の質的変容が生じて来たことを指摘し、アイデンティティをめぐる紛争を「新しい戦争」として喝破したのがカルドーであった。

カルドーの指摘する「新しい戦争」の特徴を持つ紛争は、欧州では、「アルバニア人居住圏」地域の一部も含まれるバルカン半島南西部地域で生じた 1990 年代以降の旧ユーゴスラヴィア連邦の解体に伴う紛争にみられた。

しかし、冷戦後のアイデンティティの変容がもたらしたものは、こうした対立や紛争につながりかねない否定的な側面だけではなく、イデオロギー対立の終焉や国民国家の相対化といった事態が進んだ結果、同じ民族・エスニシティ意識を共有するにもかかわらず、国境(とりわけ近代国境)によって分断されていた民族・エスニック集団が、国境を越えた地域間での共存を可能にする上での促進要因としても大きな影響を与えたという肯定的な側面も指摘されている。

冷戦終焉と東欧革命の波及によって出現した「アルバニア人居住圏」地域は、アルバニア共和国、コソヴォ共和国、そしてマケドニア共和国北西部に国境を越えて居住しているアルバニア人の間の往来を大いに自由にして活発なものとした。これは、冷戦終焉によって国民国家の相対化が進んだ結果、国民国家の主要な領域概念である国境という障壁が、事実上、低くなった結果と指摘できる。アルバニアは、第二次世界大戦後に成立した社会主義諸国の中で、最後までスターリン型社会主義

を標榜した国家であったため、事実上の鎖国状態が続いた時代があった。東西イデオロギー対立の時代、隣国であった社会主義国家、旧ユーゴスラヴィア連邦のみならず、旧ソヴィエト連邦とも、社会主義の路線対立によって断交していたのである。

鎖国状態が続いていたアルバニアのアルバニア人と当時のユーゴスラヴィア連邦を構成していた連邦構成単位であったコソヴォ連邦内自治州やマケドニア連邦内共和国に居住するアルバニア人は、それまでの様な自由な往来が、国境の存在によって断たれていたのである。

しかし、バルカン半島南西部地域諸国の独立や体制転換の結果、「アルバニア人居住圏」地域とでも呼ぶことができる、アルバニア、コソヴォ、マケドニア北西部を中心とした、人口比においてアルバニア人が圧倒的な多数派を占める地域が出現してきたのである。

本論文では、冷戦終焉後のバルカン半島南西部地域における民族・エスニシティやナショナリズムといった古くて新しいアイデンティティの顕現として、「大アルバニア民族主義」といった方向性ではなく、バルカン半島南西部地域に混住している諸民族・エスニック集団の平和的な共存や肯定的に捉えることが可能なナショナリズムの在り方の事例として、この「アルバニア人居住圏」地域について考察し、議論を進めていった。本論文の議論の上で用いた「地域」概念の定義は、基本的に、矢野暢の「<政治的生態空間>」の定義に依拠した。

なお、その上で、バルカン半島の地理的位置から、カトリック、東方正教、イスラームといった主として三つの世界宗教が、それぞれ、ハプスブルク帝国、ロシア帝国、オスマン帝国といった、バルカン半島地域にまで覇を唱えたかつての大帝国による支配や強い文化的影響によって根付いてきたバルカン半島特有の宗教的な特徴についても検討を試みることにした。

そして、バルカン半島地域における民族と宗教との間にみられるようになった特有の関係についても言及していく。

こうした地域研究の視点から議論を進めていった本論文の結論は、冷戦後のバルカン半島南西部地域におけるアルバニア人の居住に関する問題の解決には、「大アルバニア民族主義」的な過激な方向性の追求ではなく、「アルバニア人居住圏」地域の出現を肯定的に捉えるという穏健な方向性の追求こそが、現代バルカン半島南西部地域における広義の平和構築を行う上で、当該地域の平和と安定を確固たるものとする一つの基盤になり得るのではないかということである。

この件については抽象的議論にとどまらず、実際に進行中である“Euro Atlantic Integration「欧州・大西洋統合」”構想に「アルバニア人居住圏」地域とそれを包含するバルカン半島南西部地域、さらには、EUとそれを包含する欧州の平和と安定への一つの可能性を見出したい。

しかしながら、東欧革命から四半世紀が経過してもなお、残された課題は少なくない。“Euro Atlantic Integration「欧州・大西洋統合」”構想とて、EUの東方拡大にさえ滞りが見える中、さらに広域の統合は可能なのか、といった課題を始めとして残された課題は少なくない。

しかし、この「アルバニア人居住圏」地域にみられる多文化共生の萌芽は、アイデンティティをめぐる「新しい戦争」の時代の国際関係の中で、注目すべき点が多々あることを指摘して筆者は議論を終えた。

最後に、本論文の射程についての再確認をした。

すなわち、本論文は、あくまで、時間軸の点からは、1989年以降の東欧革命が南東欧・バルカン地域に波及して以降、地域あるいは領域の点では、筆者が定義した「『アルバニア人居住圏』地域」、具体的には、アルバニア、コソヴォ、マケドニア北西部に限定した地域研究である。

この「アルバニア人居住圏」地域の調査・研究、そしてそれに基づく分析の必要上、本論文では、「時間軸」あるいは「地域」や「領域」の上で広範な内容や分析枠組みを援用している。加えて、結論に至る過程で、「アルバニア人居住圏」地域に限定せずにアイデンティティをめぐる紛争が頻発している現代の国際関係に触れてもいる。ここで得られた知見が、他の「新しい戦争」の時代の国際関係に何らかの寄与するところがあるならば、筆者としては望外の喜びとするところである。

しかし、あくまで、本論文の射程は「アルバニア人居住圏」地域の地域研究である。それ以上の広範な議論等は、全てこの射程内の内容を分析する上で援用しているに過ぎない。

II. 構成と概要

筆者は、丁度、四半世紀にわたって、東欧革命後の現在の「アルバニア人居住圏」地域に相当する地域であるアルバニア、コソヴォ、マケドニア北西部を中心とした地域に学術的な関心を抱き続けて、当該地域の調査と研究を継続してきた。

実際の調査・研究の手法としては、日本の国内外での文献・資料に基づく調査・研究とともに、1993年以降、断続的に実施してきたアルバニア、コソヴォ、マケドニアを中心とした現地へ渡航しての聞き取り調査や資料収集を中心とした現地調査とを車の両輪として、同時に進めて来た。

それらの集大成でもある本論文では、「アルバニア人居住圏」地域について、以下に示すような構成で議論を進めた。

<題名>

「『アルバニア人居住圏』地域にみる民族・宗教とアイデンティティ
—現代バルカン半島の平和構築に向けて—」

<構成>**目次****序論**

- I. 問題意識と学術的意義
- II. 「アルバニア人居住圏」地域の定義と本稿の射程
- III. 構成と概要
- IV. 「アルバニア人居住圏」地域についての調査と研究

本論**第1章 冷戦終焉後のバルカン半島における「アルバニア人居住圏」地域の出現
—欧州とバルカン地域の関係—**

はじめに

- 第1節 「アルバニア人居住圏」地域の形成過程
- 第2節 EU と欧州におけるアイデンティティ
- 第3節 西欧・中東欧地域とバルカン地域の相違
- 第4節 欧州における「領域的支配」と「民族的支配」

おわりに

**第2章 「アルバニア人居住圏」地域における民族・ナショナリズムとアイデンティティ
—コソヴォ独立と冷戦後の民族・ナショナリズム—**

はじめに

- 第1節 コソヴォ独立にみる民族とナショナリズム
- 第2節 民族問題とナショナリズムの分析枠組み
- 第3節 バルカン半島における特異なナショナリズム
- 第4節 コソヴォ独立過程におけるナショナリズムの変容

おわりに

第3章 「アルバニア人居住圏」地域における宗教に関わる紛争

はじめに

- 第1節 宗教をめぐる紛争とアイデンティティ
- 第2節 グローバル化と「新しい戦争」
- 第3節 バルカン半島にみられる民族と宗教の関係
- 第4節 バルカン半島の安定とオスマン帝国 500 年の平和

おわりに

第4章 「アルバニア人居住圏」における民族・宗教とアイデンティティ

—「アルバニア人居住圏」地域における平和への課題—

はじめに

第1節 コソヴォ紛争にみる「人間の安全保障」

第2節 コソヴォ紛争の展開と起源

第3節 「人間の安全保障」と下位地域統合体

—黒海経済協力(BSEC)の事例から—

おわりに

第5章 「アルバニア人居住圏」地域をめぐる平和構築

はじめに

—「アルバニア人居住圏」地域をめぐる「新しい戦争」—

第1節 「新しい戦争」の時代とアイデンティティ

第2節 「新しい戦争」の時代の平和構築

おわりに

多文化共存の可能性と課題

—結びにかえて—

I. 「『アルバニア人居住圏』地域」にみる「新しい」アイデンティティの可能性と展望

II. 残された課題

—四半世紀を経ても残された課題とは何か—

注

引用・参考文献

謝辞

以上の構成に基づいて、議論を進めた。

まず、**序論**において、本概要書で先述した本論文の問題意識と学術的意義、そして筆者による「『アルバニア人居住圏』地域」の定義と本論文の射程を明示して、その調査・研究の経緯の概略について述べた。

つづく**本論**では、5章構成で、調査・研究結果の分析を行った。

第1章では、冷戦終焉後のバルカン半島における「アルバニア人居住圏」地域の出現を欧州とバルカン地域の関係から論じた。

まず、「アルバニア人居住圏」地域の形成過程について、その歴史的経緯に注目しながら詳述した。

つぎに、欧州や欧州統合へと進むEUの持つアイデンティティとはそもそもどういふものであるのかを考察する。そして、西欧・中東欧地域とバルカン地域においては、「領域的支配」と「民族的支配」といったところにアイデンティティの相違

につながる大きな相違が存在することを指摘した。

第2章では、本論文の地域研究の対象である「アルバニア人居住圏」地域におけるアイデンティティについての検討に着手する。

その第1点目として、民族・ナショナリズムとアイデンティティの関係について考察した。

ここでは、コソヴォ独立と冷戦終焉後の民族・ナショナリズムとの関わりを論じながら、主として先行研究にみられる民族問題とナショナリズムの分析枠組みに基づいて、コソヴォ独立にみる民族とナショナリズムを分析する。

これにより、冷戦終焉後の国際関係の中でみられる普遍的な民族・ナショナリズムの問題とバルカン半島における特異なナショナリズムの特性を検討する。こうして、バルカン半島地域の具体的な事例を俎上に乗せて、民族・ナショナリズム問題の普遍性と特殊性を明らかにすることに注力した。この議論を通して、コソヴォ独立過程におけるナショナリズムの変容が浮き彫りにされるべく考察を進めた。

第3章では、「アルバニア人居住圏」地域における宗教に関わる紛争について論じた。「アルバニア人居住圏」地域におけるアイデンティティと紛争との関係について、検討対象の2点目としては、宗教に関わる紛争について焦点を当てた。

とくに、バルカン半島南西部地域に出現した「アルバニア人居住圏」地域における冷戦終焉後のアイデンティティの発現の中で、冷戦後の世界で少なからぬ影響を与えているアイデンティティの対象の一つといえる宗教に関わる問題や対立・紛争といったものが、いかなる位置を占めているのかについて検討した。

そのため、グローバル化と宗教復興の関係から「新しい戦争」について再考した上で、バルカン半島にみられる民族・ナショナリズムと宗教との間の特有な関係性を明らかにした。その結果、500年間にわたって、バルカン半島地域における平和が維持されたオスマン帝国支配時代のバルカン半島の統治の在り方について、若干の言及を行った。

第4章では、ここまでに論じてきた「アルバニア人居住圏」地域における民族・宗教とアイデンティティについて統合的な観点から、コソヴォ紛争や下位地域統合体の具体的事例として“Black Sea Economic Cooperation(=BSEC「黒海経済協力会議」)”を取り上げて、「人間の安全保障」概念に焦点を当てながら、「アルバニア人居住圏」地域における平和の可能性と課題を検討した。

第5章では、「アルバニア人居住圏」地域の地域研究から、「新しい戦争」とは何か、民族・ナショナリズムと宗教の関わるアイデンティティとは何か、そして「ア

ルバニア人居住圏」地域とそれを包含するバルカン半島南西部地域における広義の平和構築の基盤になるものとは何か、といった課題について、ここまで述べてきた議論に基づいた筆者の見解を述べて、ここまでの議論をまとめることとした。

そして、最後に、本論文から導き出される「アルバニア人居住圏」地域における「新しいアイデンティティ」の萌芽にみる多文化共生の可能性と残された課題について結論を述べた。

ところで、再度、強調しておくが、あくまで、本論文は、冷戦終焉後のバルカン半島南西部地域に出現した「『アルバニア人居住圏』地域」を射程とした地域研究が主題である。

しかし、この地域研究から、アイデンティティをめぐる「新しい戦争」の時代の他の地域紛争について、その予防外交、紛争解決、紛争後平和構築といった事例に応用可能な知見を見出すことが可能であるならば、筆者としては、望外の喜びとするところである。